

「あんな山が本当にあるのかしら、この目で見たい」という。本当にそう、それだけ。憧れよねえ

聞き手Ⅱ毛利マナ

あのね、ばあばが生まれたのはね、一九三三年八月一三日、太平洋戦争が始まる前よね。二年生頃に太平洋戦争が始まったの。小二で始まって小六で戦争が終わったの。敗戦になって、釜山から引き揚げてきたんだよね。釜山で生まれて小学校六年生まで釜山にいたの。

—小二の頃のことか、まだ覚えてる？

小二……ね、うつすらと覚えてるかな。戦争になったというのだけは、はっきりと覚えてる。衝撃的だったからね。空襲警報が鳴ると、大人たちはみんなもう緊張してたよ。戦争が始まったということ。戦争は四年あったでしょ。始めの一、二年くらいは、まあ穏やかだったよ。でも、だんだん釜山も危険だということで、昭和二〇年の何月になるのかな。五月か六月にね。おばあちゃんとばあばとそれから弟二人と、四人で疎開したの。釜山から一時間ぐらい電車乗って行くところ。知り合いが「空いたおうちがあるから来ていいよ」って誘ってくれたの。そこへ行って二カ月か三カ月で八月一五日がきたのよ。だからちよつとの間、疎開したことがあるの。

—疎開先では、普通の小学校に行ったんだよね。どうだった？

疎開先の学校へ二カ月か三カ月行ったら、もう夏休みなの。敗戦が八月一五日でしょ。その前からほとんどお勉強なんかしないのよ。運動場を畑にして野菜植えたりしてたのよ。

—そういえばさ、いつから釜山に住んでいたの？

ばあばのおばあさんのお兄さんが、釜山で米問屋さんをしていたの。お米の、総締めだったのよ。それでばあばのおじいさんとおばあさんが、お兄さんに誘われて行ってお米屋さんを始めたの。和歌山から釜山に行ったの。ばあばのお母さん、あんたのひいおばあさんは、釜山で生まれたのよ。

和歌山というところはね、ばあばのお母さんが言うには、お米のできない県だったの。今はどうか知らないけど。だからみんな海外に出て行くわけ。お米はできないっていうのはもうやつぱり……食べ物がないからね。梅はできるけど。だからおばさんも、和歌山からアメリカのロサンゼルスに行っていたよ。

—学校が休みの日とかは、何をやっていたの？

だんだんと戦争が激しくなる前はね、物心ついたとき、戦争の前……小さい頃だからよく覚えてないけど。近所には、子どもがいっぱいいいたよ。日本人の子ども。ああ、でもね、そういえば小さいときからみんなだね、みんなで缶蹴り、よくやったよ。二〇人ぐらい集まって街の真ん中で。通るのはせいぜい馬車くらいだから。

—馬車？ すごいね！

それぐらいだよ、通るのは。車なんてないから。荷物を積んだ牛とか馬、それくらいだから。

繁華街の中にあっただけだね、うちは。お店は、お米屋さん。

それでね、お米屋さんから始まって、いろんな食料品……缶詰とかお砂糖とか、そういう食料品をいっぱい扱って、大きく商売をしてた。家も、ものすごく広かったよ。

従業員……朝鮮人の使用人が、七、八人は必ずいた。女の人は家事をしてくれてね。それとウチは、子どもが多いから、八人のきょうだいには子守が必ずいた。

きょうだい同士で子守はしなかったの？

しない、しない。そのほかに朝鮮人のおじさん。といっても若かったんだらうね。とても信用できるおじさんとお婆さんがいた。お婆さんは洗濯。それからおじさんのほうは、お庭の掃除。倉庫の中の整理とか、そういうの。一日おきぐらいかな、毎日来てたのかな。(日本に)引き揚げてくるときに、そのおじさんとお婆さんはね、船までついてきてくれた。それでね、朝鮮のお餅をついて「船で食べてください」って、持ってきてくれたの。

ー仲良しだったんだね。

そんなに付き合うわけじゃないもの。小学生だから。お菓子をくれたりとか、絶対がない。こつちがあけても、向こうからもうこうとはない。

それでね、その奥さんのほうは洗濯してくれるわけなんだけどね、パリンパリンにノリつけてね、夏なんかだと、お日様がかんかん照りでしょ。ノリが効いてパリパリになるわけ。シートなんかもう。で、ねえ、海から泳いできてさあ、日焼けしているところに、そこで寝るとすぐ痛かった。そういう思い出はあるわね(笑)。パリパリとして痛かった(笑)。

戦争が終わって、引き揚げてくるときに家の道具は、全部うちで働いていた朝鮮人が来て、持って行った。

ーお母さんとお父さんは引き揚げるとき、どんな感じだった？
どんな感じもこんな感じもないよ。何かさっぱりしたもんだったね。もうどうしようもないもんね。

だから持つて行けるものだけね、荷物にして。うちは割に豊かだったのかな。船をチャーターして。荷物をそこに積んで、一番大きいお兄さん。大学卒業してたのかな、大学生だったのかな……一人で船に乗って、荷物と一緒に日本に帰った。

次に、二番目のお兄さん、一番上のお姉さんと、それからすぐ上のお姉さん。その三人で船をチャーターして、日本に帰ったの。三人だけで。

ー子どもだけで？

一番上のお姉さんは、もう二〇歳過ぎていたしね。次は女学生だったしね。二番目の男の子は何歳だったのかな。一八ぐらいかな、中学生ぐらいかな。

ーへえ。けっこう大人だね、みんな。

みんな、そうよ。今と違うのよ。大人なのよ。大人にならないとね。それからばあばと、一番下の弟、あと今、動物園をやってる弟、それと亡くなったけど、もうひとりの弟の四人の子どもと、お父さんとお母さんとお婆あちゃんの七人で帰ってきた。

ー帰るときどう思った？「ヤッター、帰れる！」みたいな気持ちだったの？

何もないよ。これから先どうなるんだらうって。だって、小学校六年生だからさ、そんなにいろんなこと考えられないよ。どうなるんだらうって気持ちだけ。お父さんとお母さん、お婆あちゃんもみんないるし、子どもも、三人一緒にいるからね、だから、そんな不安はなかったよ。